

一枚の布

—仏像がまとう衣に関する考察—

One Piece of Cloth — Consideration for Buddha Statues' Clothing —

Bunka Fashion Graduate University
Toshiko Kato

文化ファッション大学院大学
教授 加藤 登志子

要旨：日本は古代より大陸から多くの影響を受けてきたが、服飾に関して言えば3～4世紀の古墳時代前期に高度な中国の文化が朝鮮半島を経て流入した。この時代には貫頭衣ではなく前割式の衣服が伝わり上下二部式の服装をしていた。しかし当然ながら現在のような衣服としての形はまだ作られておらず布を体に巻く形式であった。日本服装史における「一枚の布」の起源を考えると、古墳時代より遡りインドで古くから着用されていたサリー、ドウティ、サロンなど長い布を体に巻き着用するものや、袈裟を体にまとった僧侶の姿を思い浮かべる。本研究は仏教僧、仏像の法衣の様々な種類、着用方法について探った。その起源はインドであり仏教の伝来ルートに乗って形を変えながら日本にやって来た。仏像がまとう一枚の布にはさまざまな着用方法があり、美しい布の動きが表現されており、こうした一枚の布による造形は仏教の起源当時から存在するということがわかった。仏像の衣に見られる美しいドレープは僧侶が一枚の布を自身の身体にフィットさせることによる布の余り、歪みの反動から出る布の表情の再現であり、衣服制作の観点から考えると「着せる」のではなく自身が「着る」という行為によるしわやドレープであるという考えに至った。仏像のまとう一枚の布から服作りの原点を考える契機となった。

1. 序論

筆者は1993年、一枚の布を体に纏わせるという方法で服作りをした経験がある。(図1) 製作したものは、僧侶の衣服である「袈裟」の着用方法を参考にしたものであった。まずは資料を参考に、一枚の長い布を用いて袈裟の形を作る巻き方の練

習を行った。工業用ボディに巻くのだがうまくいかない、袈裟の特徴である縦方向に締めながら体にフィットさせるということがとても難しかった、布が緩んでしまい形にならない。しばらく繰り返しているうちに、これは本来僧が自分で着用するものなので人に着せるより着る本人が巻いて行った方が上手くいくのではないか、という考えが廻

提出年月日：2019年1月15日

受理年月日：2019年2月28日

った。これを実践したところ人に着せるよりも格段に体にフィットしたという記憶がある。しかもフィットした部分には美しいシワが寄り、切り替えなど一つもないのにもかかわらず、袖のような形まで出来てしまった。(図2) この時袈裟だけではなく袈裟の下に着るスカートのようなもの「^{くん}裙」を参考にして、袈裟のようなワンピース、ブラウス、裙のようなスカートを製作した。これがカンボジア僧の袈裟と裙であることがわかったのは、それから13年後、井筒雅風氏の『法衣史』によるものであった。そこには袈裟と裙の着用方法が記載されており、僧侶の着用する衣服である法衣の歴史をひもといていた。

一枚の布といえば日本を代表するファッションデザイナー三宅一生を思い浮かべる。パリ・コレクション初参加である1973年に発表したコレクションはインドのサリーや日本の着物などから着想を得た、一枚の布を身にまとうことで完成する衣服およびそのコンセプトであった。西洋発祥である衣服は、基本的に身体のラインに沿って立体的に成形されるが、平面状の布をたたんだり、折ったり、切ったり、くり抜いたりすることによって、布が衣服の構造となる「一枚の布」はヨーロッパのファッション界に大きな衝撃を与えた、¹⁾ その後も様々なデザイナー達が一枚の布をテーマにコレクションを発表しており、「一枚の布」の起源については以前より興味深いものがあり、本研究へと至った。

日本は古代より大陸から多くの影響を受けてきたが、服飾に関して言えば3～4世紀の古墳時代前期に高度な中国の文化が朝鮮半島を経て流入した。この時代には貫頭衣ではなく前割式の衣服が伝わり上下二部式の服装をしていた。しかし当然ながら現在のような衣服としての形はまだ作られ

ておらず布を体に巻く形式であった。²⁾

日本服装史における「一枚の布」の起源を考えると、古墳時代より遡りインドで古くから着用されていたサリー、ドウティ、サロンなど長い布を体に巻き着用するものや、袈裟を体にまとった僧侶の姿を思い浮かべる。本研究では仏教僧、仏像の法衣の様々な種類と、着用方法について探る。
注

1) Laurence Bénaim, *Issey Miyake*, (Thames & Hudson Ltd, 1997) P.12

2) 井筒雅風『原色日本服飾史』(光琳社出版 1998年) 449頁

2. 仏教僧の衣服に関する歴史

紀元前5世紀ごろインドのシャカ族の王子として生まれたゴータマ・シッダール(後の釈迦)は周囲の人々の生老病死などで苦しむ姿に心を痛め、妻子を捨て29歳で出家する。苦行の後、菩提樹の下で瞑想に入り35歳で悟りを開きゴータマ・ブッダとなり、80歳で入滅するまで人々に人間としての正しい生き方や、苦しみから逃れるすべを説教したと言われている。インドに発祥した仏教が中国に伝来したのは、西暦67年の後漢の明帝時代である。当時この国における一般社会思想は老荘の道教であって、仏教はそれと対立しながらその歴史を繰り広げていった。中国の河南地方では、地理的、民族的違いから南方仏教と北方仏教に分かれている。南方仏教は俗社会と宗教社会の次元の相違を示し、王に対して礼拝する必要なしとした。その経路は、ビルマ、タイ、セイロンなど東南アジア系に伝った。それに対して北方仏教は祭政一致の観点に立って、王を奉るという方式で、その後朝鮮に伝播された。¹⁾ 日本への仏教伝来は欽明天皇13年(552)であったとされる。

『日本書紀』の記述によると、この年、百済の聖明王が我が国に使者を遣わして、「釈迦仏の金銅像

一軀・幡蓋若干・経論若干巻」を献じたという。一体の仏像と少しばかりの仏具、經典も伝来を持って「仏教伝来」とした、これが我が国への仏教の公伝とされている。²⁾本章では仏教日本伝来前の仏教僧の衣服である法衣について述べる。

2-1. 法衣の意義と制定

仏教僧の衣服、それは何か特別なもののように思われるが、実は特別なものではなく衣服の歴史から見たとき、いつの時代か何処かの場所において一般の衣服として用いられていたものが宗教の保守性により自国古代の風俗ばかりでなく異国の風俗をも残しているものなのではないか。僧侶の衣服である法衣とは何か、井筒雅風氏の『袈裟史』によれば、「仏弟子としてのその教理を信奉し布教する僧の服装である。」と書かれている。³⁾釈迦が最初に仏教を開かれたとき、果たしてこの教団の法衣としての制定はあったのであろうか。久馬慧忠氏の『袈裟の研究』によれば「釈迦がどのような経緯を経て、それを制定されたのかは、経文⁴⁾にも律文⁵⁾にもその年月日は記されておらず、またその経過も順序立ててはいない。ただはっきりしているのは、釈迦の成道後まもない初期において、釈迦や仏弟子たちも、仏教僧専用の衣服を着てはいなかった。」⁶⁾と述べている。ではどのようなものを着ていたのか、その頃のインドでは約90種類の外道と呼ばれる仏教以外の修行者が多くいたが、律によればある種の外道者は奇をてらうため、木の葉、獣の皮、あるいは人毛で作った衣服をまとい異様な姿をしていたようである。一方仏教徒はそれほど異様な姿ではなく、しかし在家信者とも少し異なる修行者らしい服装をしていたのではないか。釈迦が出家し苦行林に入った頃、菩提樹の下で悟りを開き鹿野園で説法した頃、及び初期の仏弟子たちは外道と同じ服装はしてはいな

かったようである。また、外道と仏弟子がしばしば見間違えられることもあり、仏弟子専用の僧服が考えられていたといわれている。⁷⁾また、松本文三郎氏の『仏像考古学講座第八巻』の仏像仏画の起源①によれば。

「古来東洋における仏教学者の説によると一般に仏菩薩像の製作はすでに仏時代にはじまった。と言われている。その論拠の中心は『増一阿含卷二十八』⁸⁾の文であって釈迦が一時姿を隠された時期があり、その姿を見るために舎衛国王波斯匿⁹⁾及び憍賞弥国王優填¹⁰⁾が造らしめたと言われているが漢訳のこの経は南方仏典には存在しないもので後世挿入せられたことは疑いないのである。云々中略

その他仏像仏画制作の起源に関する伝説は前述の通り、いずれも仏時代にまでさかのぼろうとするものであるが、現在の考古学研究の結果はむしろこれを否定するものである。云々下略 一世紀以後に訳された漢訳の經典は勿論重要な論証ではある、これは仏像仏画についてではあるが法衣の問題についても同様に考えられる。」と言っている。

インドにおける当初の信仰の対象は仏舎利¹¹⁾であり塔¹²⁾であり、法輪¹³⁾や足跡¹⁴⁾であった。ようやく一世紀末頃にインド西北ガンダーラや中北部マトゥーラにおいてはじめて仏像菩薩の製作が行われた状態であった。しかしこの像の制作が僧の象徴として何等かの根拠をもって造られている以上その姿を形づくる衣服が現実に使用されていたと見るべきで、この頃には一応法衣というのが出来上がっていた。すなわち釈迦在世のころより約五世紀間のいずれかに完成したことが考えられる。¹⁵⁾その形状については、服装の形、および着こなしはインド固有の服装であったということは容易に予想される。つまり右肩を脱ぎ、大き

な長方形の布をぐるぐると体に巻きつける服装である。西洋の服装は獣の毛皮を着ることから発展しているの、ズボン、上着など、体に合わせて曲線的に作る方向へ進んできたが、東洋の服装は木綿の織物を着ることから発展しており、体に合わせた曲線的なものではなく、直線的方形のものを体に合わせて着こなす方向へ進んできた。¹⁶⁾

2-2. 法衣制定の事情

このような、インド人の基本的着こなしの上にかに仏弟子専用の法衣が作られたかについて述べる。なぜ仏弟子専用の服装が成立したかという、外部的事情と内部的事情との二つが絡み合って必要にできたといわれている。

2-2-1. 外部的事情

慈雲尊者（1718年～1804年）が『方服図儀略本』¹⁷⁾の中で「縁有って然して後に起る」と言っているように、全ての戒律は、まだ何らかの問題が起きる前に予測して制定されることはない。」釈迦在世中、仏弟子らしからぬ振る舞いをしたときに、必ず三度確め念を押されたあとで、その場に適した規則を定めたようである。もし仏弟子が何か間違いも起こさなければ、当然律文など成立はしない。法衣が仏弟子専用の衣服として作られたきっかけは何といっても外部的事情が大きな役割を果たしているようである。『十誦律』¹⁸⁾によれば、「ビンビサーラ王¹⁹⁾、象輿に乗り早朝に王舎を出でて、道に外道梵志²⁰⁾を見るに、仏に見えんと欲す。象より下り礼拝せんとす。よって仏に従って乞顔す。僧衣をして外道の衣と異ならしめ、分別すべからしめたまえ。」とあり、外道と仏弟子が同じような衣服ではとても見分けがつかなかった、ビンビサーラ王は釈尊在世中に深く仏教に帰依し、厚く仏法を保護された王様であった。わざわざ象の乗り物から降りられ、礼を尽くそう

とされたが見間違いであったとは、さぞかしお互いに気まずい思いをなされたことであろう。これによりおおよその法衣制定の外部的事情がわかる、つまり在家の人々の服装とも違い、外道の人々とも異なる衣服が必要であった。ではどのようなところで違いを出すのか、それは『摩訶僧祇律』にあるように「^{せつる}截縷」と「^{ぜんしき}染色」の二点である。截縷とは一枚の布を何枚かの布片に裁断し、これをさらに綴り合わせて衣服にすることである。染色とは在家の人々が普通に用いられているような色である原色、主に白色を避け、僧服としてふさわしい色に染めるということであった。しかし、これは外道のように異様な姿をして目立たせるというのとは本質的な違いがあった。このように仏弟子専用の僧服の基本が定められたことは、単に便宜的なものではなくそれをつなぎ合わせて衣服にするという仏教徒の誇りを示したもので大変重要な意義を持った。²¹⁾

2-2-2. 内面的事情

内面的事情とは仏弟子自身の生活態度の問題である。一体何であるのか『有部律』²²⁾によれば「釈尊が祇園精舎に在するとき、仏弟子達が沢山の袈裟を蓄え、朝の洗顔のとき、手足を洗うとき、釈尊を礼するとき、掃除のとき、村で乞食するとき、食事のとき、聞法のときなど、日常生活の中で目まぐるしく袈裟を着替え、修行の妨げなだったのでその時釈尊は分別して応に蓄うべし」と申され、よくことをわきまえて僧服をつけるよういさめている。一方『五分律』²³⁾では「一比丘あり、仏に白して言さく、世尊は常に我等が為に少欲知足を讚歎したまえり、我甚だこれを樂えり、願わくば我等に裸形を許したまわん事を。仏曰く、愚痴人、外道の儀法を作さんと欲せんとは」と言っている。²⁴⁾ もしも仏弟子たちがいつも仏弟子らしく謙虚

な態度で生活しているならば、自然とそれらしい衣服となり現れるのであるが、私たちは色、質、形などの表面的な美しさに惑わされ、それを追い求めがちである。世間では当たり前のこととして認められているのでいつも表面を飾る衣服が流行する、美しいものを求める心は決して悪いことではないが、しかしそれは、ともすると「妬み」「盗み」「侮り」「奢り」などというあや過ちをつくるもととなる。したがって仏弟子の衣服としては、わずかな罪も生じないように最善の工夫と、行き届いた心遣いが要求される。これら外面的事情と内面的事情が絡み合法衣が生まれた。²⁵⁾

3. 法衣の名称

当時の僧服といえば袈裟だけを意味していた。その名称は釈迦の在世当時すでに使われていたらしく、僧が持たなければならぬとされたのが三衣^{さんい}といい、巴利語^{ばりご}²⁶⁾で三支縛羅^{さんしぼら}と呼ぶ長方形の三枚の布である。これを総称して kasaya (カシャーヤ) とする。²⁷⁾ 袈裟の語源は『望月仏教大辞典』²⁸⁾によると「kasaya (カシャーヤ) は音訳されて袈裟^{えじき}。壊色、不正色、赤色、染色^{ぜんしき}などと漢訳されている」とある。『四分律』²⁹⁾ や『十誦律』などによると、「青・黒・木蘭色などに染色する」という規定があり、純正な色ではなく濁った色、壊色とすることが定められている。また、「袈裟のことを糞掃衣^{ふんぼうい}とか、衲衣^{のうい}等と称するのは、釈尊の在世時、糞塵中に捨てられていたぼろ切れから使用に耐えうる布片を切り取りその破片を縫い合わせて作衣したことに由来する」と書かれている。中国、唐の僧玄奘^{げんじょう} (602～664) は『大唐西域記』(646年)³⁰⁾ 巻二で比丘の法衣について、また玄奘の徳を慕ってインドに赴いた義浄^{ぎじょう} (635～713) は『南海寄歸内法傳』(689年)³¹⁾ 巻二で比丘尼の僧服について、次の五衣をあげている。³²⁾

僧伽梨^{そうぎやり} (サンガーティ) = 九条袈裟(礼装)

鬱多羅僧^{うつたらそう} (ウッタラーサンガ) = 七条袈裟(外出着)

安陀會^{あんだえ} (アンダルヴァーサ) = 五条袈裟(普段着)

僧祇支^{そうぎし} (サンカクシカー) = 袈裟の下に着る肌着

泥縛些那^{ニヴァーサナ} = 比丘用の裙(下衣)

俱蘇洛迦^{クスーラカ} = 比丘尼用の裙(下衣)

3-1. 僧伽梨

僧伽梨は、九条袈裟から二十五条袈裟までのいわば儀式用に着る礼服である。衣の大きさは『四文律』『十誦律』などにより異なるが長さ五肘～四肘半×広さ三肘くらい。ここにある「肘」とは手の指先から肘までの長さを示すインドの単位で通常 40cm くらいとされている。これを大衣と呼ぶのは、三衣中最も大きな衣であるからで、七条袈裟は中衣、五条袈裟は少衣と称した。大衣は裏地をつけるのが定説であるが二十五条袈裟は一山の長老が儀式の際に着用する最高位の袈裟とされた。

3-2. 鬱多羅僧^{ウッタラーサンガ}

鬱多羅僧は上着衣の意。七条袈裟で長さ五肘～四肘半×広さ三肘～二肘半。新衣の場合は裏地なしの一重で作ったが、糞掃衣の場合は必ず裏地を付けた。彩色が良く残っている仏像や仏画を見ると、胸元や足元で反転している時に見える袈裟の裏地は、単一な赤や緑や黒色で描かれているものが多い。七条袈裟は僧院を出る際に着用する外出着であって集会・説法・托鉢などの際に多くこれを着用した。(図3)

3-3. 安陀會^{アンダルヴァーサ}

安陀會は內衣の意。五条袈裟で長さ五肘～四肘×広さ三肘～二肘。小さい衣ゆえ小衣と称した。袈裟の中最も粗末なものであるが僧院内で普段着として使用された。僧伽梨、鬱多羅僧、安陀會についての素材については諸律さまざまだが、麻・綿・樹皮・絹・羊毛・鳥毛などがあり、綾・錦な

どで作られた豪華な袈裟は施設に限り着用が許された。南山大師道宣（596～667）は「絹は蚕の生命を損なって得る殺生財ゆえ、慈悲の服とはならない」と主張したがどこまで守られたかは疑問である。西大寺叡尊の『御教誠聴聞集』³³⁾によると、晩年は絹の衣を愛用しており南山律を我が国に伝えた鑑真所用の袈裟に絹製のものがあったことが知られる。

3-4. 僧祇支^{サンカクシカー}

僧祇支は袈裟の下に着る肌着であるが、袈裟とほぼ同大の長方形の衣、僧服である。インドでは一枚布、一幅で作ったものらしい。しかし、『大乘比丘十八物図』³⁴⁾によると「インドの衣財は一幅で足りるが、本邦のものは図のごとくする」とあり、三枚の横長の布を縫い合わせた僧祇支の図を載せている。袈裟と同様に周囲に「縁」をめぐらし四隅には額を施し、縁の内側に二本の「紐」を付けただけの粗末な衣である。（図4）しかし、中国・日本の仏像・仏画をみると、花模様などを散らした華やかな僧祇支も多い。

3-5. 泥縛些那・俱蘇洛迦^{ニヴァーサナ クスーラカ}

裙について、中西誠應は著書『画像須知』中で二種の図を描いている。図5-aは比丘用の腰巻き式の裙、泥縛些那（ニヴァーサナ）である。図5-bは比丘尼用のスカート式の裙、俱蘇洛迦（クスーラカ）である。図5-cは帯紐である。仏像はほとんどの場合、男性としての姿で描かれるために、通常は図5-aの腰巻き式の裙を着用しているとみて間違いない。上から帯紐を結んだ後に、上辺を外側へと折り返して着ており、裙の始末の殆んどは体の前面中央にくるように着用しており、これが中国、朝鮮、日本など東アジアの仏像中に広く広まった。³⁵⁾

4. 法衣の着用方法

4-1. 袈裟の着用方法

袈裟の着用方法を図6に示す。その方法は大きく分けて左肩を覆う「偏袒右肩」で弟子が師に奉仕する^{へんだんうけん}場合の着用方法。両肩を覆う「通肩」は師が弟子に説法するとき、あるいは托鉢、座禅の時に用いるの着用方法である。³⁶⁾

『観音経』の初めに「爾時無尽意菩薩即從座起^{にじむじん にぼさつそくじゅうざき}偏袒右肩合掌向仏而作是言尊・・」^{へんだんうけんがっしょうこうぶつにさぜごんせそん}

とある、ここでは爾時無尽意菩薩³⁷⁾が座より立ち、右肩を偏^{ひとえ}に袒^{はだぬ}ぎて、合掌して仏に向かうことを示している。釈迦や目上の仏弟子に相対するときは、必ず右肩を出さなければならない。もしも両肩を覆う通肩にしていれば袈裟の胸元から右手を出し、素早く右肩を出して偏袒右肩にしなければならない。着物を着ている人が仕事をするとき素早くたすき掛けをして袖を始末するように、目上の人のためにいつでもご用をいたしましょうという姿勢を見せる袈裟の着用方法である。³⁸⁾

4-2. 『画像須知』に見る裙、僧祇支、袈裟の着衣図

前述した5種類の僧服は実際どのように着けるのか京都の仏画師（江戸時代）中西誠應の著書『画像須知』を図7に示す。

- a) 下衣として裙を付けた図
- b) その上に僧祇支を通肩に着用した図
- c) 僧祇支の上に袈裟を通肩に着用した図
- d) 僧祇支を通肩に袈裟は偏袒右肩に着用した図
- e) 僧祇支、袈裟共に偏袒右肩に着用した図

図7-bの図では図4で示した僧祇支の帯紐は見えないが、中国の古代仏教の場合、胸高に結ばれている帯が見える。羽織の帯紐のように胸の正面で結べば両肩を覆い垂れてくる僧祇支をしっかりと固定できた。また、僧祇支は本来比丘尼が胸や

乳房を覆い隠すために積尊が定められた肌着のため、通肩に着るべき衣であるが、その後比丘たちにも僧祇支の着用が義務付けられることになり、偏袒右肩に着ることも行われた。インドでは比丘も、比丘尼も外出の際には必ず僧祇支を着用したが、袈裟も僧祇支も通肩に着るのが規定であった、法衣の種類、着用方法については以上となる。³⁹⁾

注

- 1) 弓削公子「僧服について その1 歴史的考察」『大阪女子短期大学紀要』1号1970年 40頁
- 2) ひろさちや『はじめての仏教』(中央文庫 2001年) 269頁
- 3) 井筒雅風『袈裟史』(雄山閣出版 1965年) 23頁
- 4) 釈迦の教えを文章にまとめたもの。
- 5) 集団生活を営む僧侶の生活を記したもの。
- 6) 久馬慧忠氏『袈裟の研究』(大法輪閣 1978年) 16頁
- 7) 久馬慧忠氏『袈裟の研究』(大法輪閣 1978年) 17頁
- 8) 仏教の漢訳『阿含経』の1つ。
- 9) 釈迦と同時期中のインド、コーサラ国の王、舎衛城に住み釈迦教団を保護した。
- 10) 紀元前5、6世紀、釈迦在世の頃のインド、コーシャンビーの国王、仏教信者、仏教の始まりとされる牛頭梅檀の仏像を作らせたという。
- 11) 釈迦の遺体、遺骨のこと。
- 12) 仏舎利を収めた塔、舎利塔ともいう。
- 13) 仏の教え、仏が教えを説くことで、釈迦の説いた法を人から人へと広まること。
- 14) 仏足石という、釈迦の足跡を石に刻み信仰の対象としたもの。古いものは紀元前4世紀に遡るとも考えられている。このような仏足石や菩提樹などを用いて、釈迦やブツダを表現した。
- 15) 井筒雅風『袈裟史』(雄山閣出版 1965年) 24頁
- 16) 久馬慧忠『袈裟の研究』(大法輪 1978) 16-17頁
- 17) 江戸時代、河内国高貴寺の僧、慈雲尊者飲光が自身の唱えた神道を説く著書
- 18) 仏教教団における規則や作法、戒律などをまとめた律書のひとつで、説一切有部によって伝承されてきたもの。四分律・五分律・摩訶僧祇律とともに四大広律のひとつに上げられている。
- 19) 古代インドに栄えたマガダ国の王(在位: 紀元前6世紀頃、または紀元前5世紀頃)。彼の治世にマガダ国はその勢力を大きく拡大し、釈迦の教えを聞き仏教に帰依したと伝えられる。

- 20) 外道梵志(仏教以外の宗教を信仰する人)
- 21) 久馬慧忠『仏のころとかたち 袈裟のはなし』(宝蔵館 1989年) 12頁
- 22) 四大広律と並び現存する6つの律の一つ。
- 23) 仏教における上座部一派である化地部によって伝承された律のこと。十誦律、四分律、摩訶僧祇律と共に、「四大広律」と呼ばれる。
- 24) 久馬慧忠『仏のころとかたち 袈裟のはなし』(宝蔵館 1989年) 13頁
- 25) 沢木興道監修 久馬慧忠『袈裟の研究』(宝蔵館 1967年) 19頁
- 26) 現在スリランカ、タイ、ミャンマー、カンボジア、ラオスなどの南方仏教に使用されている言語。
- 27) 井筒雅風『袈裟史』(雄山閣出版 1965年) 23頁
- 28) 代表的な仏教辞典、本編5冊、年表1冊、増補1冊、補遺2冊という構成。
- 29) 仏教の上座部一派である法蔵部(曇無徳部)に伝承されてきた律である。十誦律、五分律、摩訶僧祇律と共に、「四大広律」と呼ばれる。この四分律は、これら中国および日本に伝来した諸律の中では、最も影響力を持ったものであり、中国・日本で律宗の名で総称される律研究の宗派は、ほとんどがこの四分律に依拠している。
- 30) 唐僧玄奘が記した当時の見聞録・地誌である。646年(貞観20年)の成立。全12巻。玄奘が詔を奉じて撰述し、一緒に経典翻訳事業に携わっていた長安・会昌寺の僧、弁機が編集している。求法の旅を終えて帰国した玄奘は持ち帰った経巻の訳業を皇帝の太宗に願い出た。
- 31) インドに渡った中国の唐代の僧、義浄の著わした書。正しくは『大唐南海寄帰内法伝』といい、『南海寄帰伝』と略称されることもある。4巻。インドおよび東南アジア諸国の旅行記で、当時の仏教の状態、僧院での生活などを知らうえで重要な資料である。
- 32) 吉村怜「仏像の着衣形式と名称」『駒沢大学仏教学部論集』第40号2009年518-517頁
- 33) 叡尊(建仁元年(1201年) - 正応3年8月25日(1290年9月29日))は、鎌倉時代中期の真言律宗の僧の書籍で、仏教戒律についての書。叡尊の本来の意図は権力と結びつきすぎたことから生じた真言宗僧侶の墮落からの再生のために、まず仏教教学の根本である戒律及びその学問的研究である律宗の再興にあった。
- 34) 大乘仏教の比丘が常備すべき十八種の法具。を記した書。
- 35) 吉村怜「仏像の着衣形式と名称」『駒沢大学仏教学部論集』第40号2009年516頁
- 36) 吉村怜「日本古代仏像の着衣とその名称 - 袈裟・僧祇支(そうぎし)・裙・右袒衫、及び偏衫・直裰・横帔-」『佛

教芸術』305 2009年10-13頁

37)爾時とは「その時」のこと無尽意菩薩とは衆生を尽きることなく余すことなく救う仏尊のこと。

38)久馬慧忠『仏のこころとかたち 袈裟のはなし』(宝蔵館 1989年) 61頁

39)久馬慧忠『仏のこころとかたち 袈裟のはなし』(宝蔵館 1989年) 58頁

5. 仏像とはなにか

釈迦は自らの存在を信仰の対象にするよう説かなかつたといわれている。このため釈迦が入滅(死去)してから500年間法輪などを石に刻んで、釈迦の存在を象徴させていた。紀元1世紀末頃、ガンダーラ(パキスタン)において、ギリシャ美術の影響を受けて仏像の制作がはじまり、マトゥラー(インド)でもインド古来の様式を受け継いだ釈迦の姿をかたどった仏像がつくられはじめた。その後、仏像が発展し、多種多様な仏像が誕生したことにあわせて、東アジア全域でそれぞれの地域の特色が加味された仏像が制作されるようになった。¹⁾

5-1. 仏像のモデルと服装

様々な仏像は、我々人間のような姿で表現されているが、そのモデルになっているのは一体何であろうか、西村公朝氏は、宗教的には様々な理由があるであろうが、仏教の祖師である釈迦の姿がモデルではないかと言っている。²⁾ 釈迦は紀元前6世紀の人物であり、仏教が最初に創り出されたのが1世紀頃と推定されているので、仏像の創造時には600年前の釈迦の姿はもちろん誰も知らない。³⁾ しかし釈迦滅後多くの仏教信者は、その偉大な徳をいつまでも慕い、釈迦の尊い姿を語り伝えていくうちに、その姿に32の特徴を取り上げ、これを「如来の三十二相」とした。この如来相が基となって釈迦の像が作られたのが紀元前2世紀頃である。その後仏弟子たちは釈迦のいわれた仏の姿を造ろうとした。しかしこの仏の像こそ、む

しろ釈迦の像よりはるかに難しいはずである。仏弟子たちはその形のよりどころを釈迦の姿に求めたことは当然であろう。この人格化表現が服装を必要とし、その形や着付けがその仏たちの役割を表す上にも重要な位置をしめるようになったのである。さてここで釈迦が仏像のモデルだとすると、次のように考えることができる。釈迦は紀元前6世紀にインド、ヒマラヤ山脈の南麓にあったカピラ王国の王子として生まれなんの不自由なく育った。装飾を身に着け、美しい衣服をまとっていた頃の姿が菩薩のモデルであり、出家し、苦行の結果悟りを開かれた、即ち仏陀となつてからの姿が如来のモデルであろう。したがって如来は仏界では最高位であるから、服装については最高のものを身につけるべきである。この考えに最もふさわしいのが大日如来である。これは仏界の王と釈迦がもしもカピラ城の王になった場合を想定した時の服装である。しかし、阿弥陀如来や薬師如来、その他の如来たちは最も簡素なもので現されている。このことは、釈迦が出家時に王子としての飾りものは一切取り除き、一枚の布を身にまわって城を出ている。そして六年間という長年の苦行であるから、仏陀となった時はおそらくぼろぼろの布を身にまとっていたことであろう。この如来の衣服を衲衣のうえという。衲衣とは僧服制定の内部的事情に当てはまる質素、簡素な法衣のことである。このように粗末な衣であるということはいかにも大変な苦行であったかを物語っており、またこれこそ、我々人間の苦しみを取り去ってやりたいという絶大な慈の表現がこの衲衣であるということにもなる。このように考えると明王の服装は、前述のように火中に飛び込み必死の救出に当たる仏たちであるから、菩薩と同じ服装であるが活動しやすい着付けとなっている。これも釈尊は、王子

の頃、武勇に優れていたということであるから明王のモデルは釈迦の勇ましい王子の頃の姿であろう。天部の服装は、王子としての釈迦を守る家来たちや、仏陀となった釈迦を守る弟子たちが姿のモデルになっているのであろう。したがって、多くの仏像の服装の中でこの天部の服装が最も大衆的であり、当時の風俗にも関連するところが多いことが考えられる。⁴⁾

5-2. 仏像の名称と種別、及びその役割

名称は「如来」「菩薩」「明王」「天部」の4種類に分かれ、階級順位は如来が最上位に位置し、菩薩、明王、天部の順となりそれ以外のものは天部の下に来る。このうち如来から天部までの4種が一般に経典や儀軌によって規定され、制作上の約束事も決められている。これ以外の像は実在した人物、空想の人物など制作上の制約はない事になっている。

如来、菩薩、天部は^{けんきょう}顕教が中心であった飛鳥から奈良時代まで、経典を基にして制作され、明王は密教が盛んになりだした^{こうにん}弘仁期から^{ぎき}儀軌をもとに多く制作された。

如来、菩薩などの制作上の約束事は儀軌が出る事により、より厳密になっていく。従ってそれ以前の飛鳥から奈良の各時代と平安以降のものとは形の上で違いが当然出てきている。⁵⁾

如来は釈迦が仏界の真理を会得した制度の姿、いわゆる悟りをひらいた時の姿である。仏像の中で最高の境地に達した人ではなく超人的な存在として表現される。役割は^{しゅじょう}衆生を教え導きする事にある。代表的な如来には釈迦如来、阿弥陀如来、薬師如来、大日如来などがある。(図8)

菩薩は悟りを得るために修行しており、如来にもうすぐなりそうな行者である。役割は上求菩薩、下化衆生という言葉が示す通り、上に向かって悟

りの道を求め、下に向かって大衆を教化する努力をする。代表的な菩薩には文殊菩薩、普賢菩薩、観音菩薩、盛至菩薩、地藏菩薩などがある。

(図9)

明王は仏教以外の宗教の神々が、仏法擁護にまわった形をとったもので、如来の使いとも、化身ともいい、^{ふんぬ}忿怒の形相で悪を打ち砕く仏像である。代表的なものは不動明王を中心とする五大明王、愛染明王、例外的に菩薩形をとる孔雀明王などがある。(図10)

天部は天の神の意で、仏教成立以前よりあったインドの原始宗教からの神々を仏教に取り入れたものである。従って如来や菩薩などとは違い、はっきりした男女の性の区別がある。如来は人間を超越したものであり、菩薩は多良菩薩や葉衣観音のように女性形に形造る事を条件づけられている特殊な例を除けば、性的抑制表現をとることが通例とされている。その点、天部は男女入り乱れて様々な形で存在する。主に武人天部と貴顕天部にわかれそれぞれの能力に応じて役割を分担し、仏法守護及びその普及と育成を司る。代表的なものとしては四天王、十二神将、金剛力士、八部衆などの武人天部。吉祥天、伎芸天、梵天、帝釈天などの貴顕天部がある。⁶⁾ (図11)

注

- 1) 吉村怜「仏像の着衣形式と名称」『駒沢大学仏教学部論集第』40号2009年514-513頁
- 2) 西村公朝「仏像の服装と着付について」『美術解剖学研究会論集』4号1977年18頁
- 3) 西村公朝『仏像の再発見 鑑定への道』(吉川弘文館1976年) 67頁
- 4) 西村公朝「仏像の服装と着付について」『美術解剖学研究会論集』4号1977年19頁
- 5) 西村公朝「仏像の服装と着付について」『美術解剖学研究会論集』4号1977年19頁
- 6) 西村公朝 下地一丸「教像の着装順序解説」『美術解剖学研究会論集』4号1977年19頁

6. 仏像の法衣

法衣の種類、着用方法について、インド、中国で異なる部分があり、その着用方法は仏像にも反映されている。対象となる仏像は、如来、菩薩、明王、天部があるが、本編では覚りを開いた釈迦の姿を基にした如来のまとう法衣について示す。

6-1. インド系の法衣を着た仏像

中国、唐の僧玄奘げんじょうと義浄ぎじょうによりあげられたインドにおける僧侶の法衣について僧伽梨、鬱多羅僧、安陀會、僧祇支、泥縛些那あるいは俱蘇洛迦を上げており、『大乘比丘十八物語』の著者、寺門派の顕道敬光も、この三衣（三種の袈裟）と二衣（僧祇支と裙）をもって五衣とし、天竺衣の正制とするがこれがインド系如来衣の基本であると、している。吉村怜氏によるとインド系の中でも裙と袈裟のみを着用するものこれに加えて僧祇支を着用するものに分けている、前者をインド系A類、後者をインド系B類と分類している。¹⁾

インド系A類(裙+袈裟)は古代インド後期のマトゥラー仏立像を図12に示す。このA類の仏像は中国・日本においても数多く分布している。単純な組み合わせのため着方も袈裟の着用を通肩か、偏袒右肩かの違いのみである。袈裟の下に着ている裙の帯の結び目が透けて見えることから、透き通るように薄い布であることが予想される。東大寺の誕生釈迦仏立像(奈良時代)(図13)のようにただ、裙だけをつけた半裸の像もあるが、これに袈裟を着用したものがA類となる。そのほかに深大寺釈迦像(白鳳時代)(図14)は、裙の端が正面中央に着ていることに注目する。興福寺旧西金堂の迦旃延像(奈良時代)(図15)は、左胸前で袈裟の鉤(かぎ)と紐が結ばれている。東大寺仏連弁の線刻釈迦像(奈良時代)(図16)は、如来衣には通常、鉤と紐はみられない、両足の下に垂れ

ている裙に注目する。平等院鳳凰堂本尊阿弥陀仏像(平安時代)(図17)は、袈裟は左右両肩にかかっているが、左肩はわずかに懸るのみ。通肩とも偏袒右肩とも言い難い。この着用方法は中国、日本でひろく流行したがインド仏像には見られない。詳細な着用方法は以下と、図18に示す。

着用方法)

- (1) 裙を着用し、袈裟を右脇から正面、及び左腕を覆い、左肩に掛けて背面に廻す。
- (2) (1)の左側面。
- (3) 背面に廻した袈裟は背面を覆い、上方を右脇下にくぐらせて正面に廻し、一巡目の袈裟に重ねる。右肩は肌脱ぎとなる。
- (4) (3)の右側面。大腿部の濃度のグラデーションは袈裟の二巡目の重なりを始まりを表す。
- (5) 一巡目に重ねた二巡目の袈裟で、正面及び左腕を覆い左肩に掛け、先端を背面に垂下させる。
- (6) (5)の左側面。膝部は裙、薄い色の衣は一巡目の袈裟、濃い色の衣は二巡目の袈裟。
- (7) インド系A類、偏袒右肩の背面。左肩に正面から廻した二巡目の袈裟の先方を掛け背面に垂下させる。

インド系B類(裙+僧祇支+袈裟)は古代インド中期のガンダーラ仏を図19に示す。インド系ではあるがそれほど類例は多くなく、中国や日本では多く見られる。中国の如来像の着衣は宋代以降、大きく変化するが日本は保守的で時代を経てもあまり変化なく、鎌倉時代以降現代の仏像まで続いている。そのほかに法隆寺峰薬師の胎児仏、薬師像(白鳳時代)は、僧祇支を体に巻きつけるようにして着用しているため右脇から左脇にかけて深いひだとしわが生じている。岡寺、義淵像(奈良時代)(図20)は、通肩に着た僧祇支の末端をいったん袈裟のしたに挿し込んだ後、引き出して右

腕にかけている。清凉寺三国伝来の釈迦像（北宋時代）は、袈裟を通肩にきているので僧祇支をきているのか着ていないのか一見不明であるが、衣の裾が三段になっているので、裙、僧祇支、袈裟を着用していることがわかる。東大寺俊乘堂の来迎阿弥陀像（鎌倉時代）（図 21）は、右肩に掛かった僧祇支の末端がいったん袈裟の下に挿し込んだあと、右腕にかかるためにU字形になっているところに注目。また、左右の腕にかかる袈裟も僧祇支も袖のように見えるが袋状の袖とは異なることに注目する。²⁾ 詳細な着用方法は以下と、図 22 に示す。

着用方法)

- (1) 下衣に腰巻風の裙を着ける。
- (2) 内衣に僧祇支をまとう。
- (3) 僧祇支をまとった背面。
- (4) 僧祇支の上に袈裟を掛ける。
- (5) 袈裟は背面から僧祇支の右脇下をくぐらせて前面に廻す。
- (6) 右側。袈裟は僧祇支の右脇下をくぐらせる。
- (7) 正面に巡らせた二巡目の袈裟は、左肩・左上腕を覆って背面に垂下させる。
- (8) 正面を覆った二巡目の袈裟は、左腕外側に大きく垂下する一巡目の袈裟の上にやや小さめに重なる。
- (9) 左肩及び左上腕を覆い背面に廻った二巡目の袈裟は左肩から背面に垂下させる。

6-2. 中国系の法衣を着た仏像

中国の古代仏教には、内衣としてインドではなく中国で創製された右袒衫うたんさんを着ている仏像が多く存在する、右袒衫を着用した仏像として最も古い、甘肅省炳靈寺西秦窟³⁾の建弘元年銘の無量寿仏像を図 23 に示す、これには美しい亀甲模様が描かれている。右袒衫とはいわゆる丸首シャツの首の部

分を左肩から右肩にかけて斜めに裁断したような形状の肌着で、身体に密着するような着衣のため、ほとんどひだがないため僧祇支とは見分けがつけやすい、この肌着は人前で裸体を露わすことを非礼だとした中国的習俗、さらに防寒上必要であった。⁴⁾ 中国系の中でも裙、右袒衫、袈裟、のみを着用するものこれに加えて僧祇支を着用するものに分けている、前者を中国系 C 類、後者を中国系 D 類としている。⁵⁾

中国系 C 類(裙+右袒衫+袈裟)は龍門石窟・古陽洞⁶⁾、北魏の比丘法生龕仏像(503年)を図 24 に示す。この仏像は裙、右袒衫、袈裟の順に法衣を着用している。この種は北魏後期、龍門石窟や天水麦積山石窟⁷⁾に多く見られる仏像形式であるが中国・日本ではあまり流行しなかった。そのほかに法隆寺献納宝物 149 号如来立像(飛鳥時代)

(図 25) は、右袒衫に紐を結んでいることに注目する、これは中国に例はない。法隆寺五重塔本の塑壁(そへき)比丘像(奈良時代)(図 26) は、正座しているため裙は袈裟のしたに隠れて見えない。法隆寺金堂壁画第十号壁本尊薬師像(奈良時代)は、右袒衫は本来身体にフィットするように作られているので、帯で結ぶ必要のない肌着であるがこの像は右袒衫のうえから帯で結んでいる。薬師寺金堂本尊薬師像(奈良時代)(図 27) はすでに唐様式になったこの像の場合、右袒衫は中国式に着用している。⁸⁾ 詳細な着用方法は以下と、図 28 に示す。

着用方法)

- (1) 下衣に前合わせの裙を着る、右袒衫を着る。
- (2) 右袒衫の上に袈裟をインド系 A 類と同様に掛ける。袈裟の上方に右袒衫が見える。
- (3) (1)~(2) の左側面。背面に廻した袈裟は上部を引っ張り上げて一部を右肩に掛け、背面前面を

覆う。

(4) (3) の右側面。大腿部の濃度のグラデーションは袈裟の二巡目の重なるの始まりを表す。腹部袈裟の上に右袒衫が見える。

(5) 二巡目の袈裟で正面・左腕を覆い、左肩に掛けて先端を背面に垂下。右肩に掛かる布(半被右肩)は背面から引き上げて掛けた一巡目の袈裟の右上。

(6) (5) の左側面。膝部は裾。薄い色の衣は一巡目の袈裟、濃い色は二巡目の袈裟。

(7) 中国系 C 類、半被右肩式の偏袒右肩の背面。左肩に正面から廻した二巡目の袈裟の先方を掛け背面に垂下させる。

中国系 D 類(裾+右袒衫+僧祇支+袈裟)は中国で盛んに多く用いられたのはこのタイプである。成都万仏寺址出土の南朝梁の仏像を図 29 に示す。胸もとに垂れてくる僧祇支の豪華な帯が特徴である。このタイプの如来像は六朝の東晋末から劉宋時代にかけて成立したようであり、これが南朝で流行するとたちまち北へと普及し北魏仏像の特徴であるかのごとく広範囲に広がった。しかし、日本はこのように盛んにはならず、インド系 A 類が、ついでインド系 B 類の仏像が圧倒的に多いとされている。法隆寺金堂壁画第一号壁釈迦像(奈良時代)(図 30)は、胸元の帯は右袒衫か僧祇支かは判断できない。先の法隆寺金堂壁画第十号壁本尊薬師像の例からすると右袒衫の帯と見るべきであるが、中国の像であれば僧祇支であろう。

東大寺蔵俱舎曼荼羅図の提婆設摩像(平安時代)は、比丘像の例で、この形式は極めて稀である。東大寺公慶堂地藏菩薩(鎌倉時代)(図 31)は、地藏菩薩の袈裟には鉤や紐をつけたものが多い。鉤紐(荒金紐)の有無によって如来衣と菩薩衣を区別することができる。⁹⁾法隆寺金堂釈迦三尊像本尊(飛鳥時代)(図 32)は上体を見ると裾を付け。

その上に右袒衫を着用し、袈裟を通肩に着用しており中国系 C 類(裾+右袒衫+袈裟)のように見えるが、台座に掛かっている懸裳の部分を見ると袈裟の裾が台座の中ほどまで覆い、左右に張り出している。仏像を安置する台を台座というが、その台座の前面に衣の裾を垂らしたものを懸裳座と呼ぶ。その下に 2 段の裾が見え、上から僧祇支、裾の裾と見ることができる。また、胸元には僧祇支の結ばれた帯が見え、その紐端は袈裟の裾の上に見える。つまりこの本尊像は裾、右袒衫、僧祇支、袈裟の順に衣を重ねているが通肩に着た袈裟の下に同じく通肩に着た僧祇支を重ねあわせるように着用しているため、外からは僧祇支が見えない。このような例は稀である。¹⁰⁾詳細な着衣図は図 33 に示す。

また、インド系 B 類(裾+僧祇支+袈裟)と中国系 C 類(裾+右袒衫+袈裟)の僧祇支と右袒衫の違いを見分けることは、かなり微妙な場合もある。たとえばインド系 B 類である古代インド中期のガンダーラ仏(図 19)のように偏袒右肩に着用したときの僧祇支と、中国系 C 類である龍門石窟・古陽洞、北魏の比丘法生龕仏像(図 24)や、法隆寺五重塔本の塑壁比丘像(図 26)のように肩肌脱ぎに着た右袒衫との違いは、衣のひだやしわの多少により明らかにすることが出来る、とのことである。僧祇支は一枚の布なので、袈裟同様ひだやしわが多く出るのが特徴である。つまり衣の表面のひだが深く、しわが多ければ僧祇支、ほとんどなければ右袒衫と判断できる。¹¹⁾

以上が如来像の主な着衣形式である、裾、右袒衫、僧祇支、袈裟の組み合わせの違い、または、袈裟を通肩、もしくは偏袒右肩の違い、によるひだや皺の表情は仏像の制作された時代ごとの材料、もしくは制作した仏師によるところで違いがある

のであろう。しかし、中国系D類に分類される法隆寺金堂釈迦三尊像本尊に関しては明らかに他の仏像とは異なる衣服の形状が見られる。台座に掛かっている懸裳の部分は特に印象的である。以上のように仏像の法衣の着用方法にはその伝達ルートによりさまざまな種類があるということがわかった。

注

- 1) 西村公朝 下地一丸「教像の着装順序解説」『美術解剖学研究会論集』4号1977年2-3頁
- 2) 吉村怜「日本古代仏像の着衣とその名称 -袈裟・僧祇支・裙・右袒衫、及び偏衫・直裰・横帔-」『佛教芸術』305 2009年10-13頁
- 3) 中国、甘肅省永靖県の黄河北岸、小積石山にある仏教石窟。
- 4) 吉村怜「仏像の着衣形式と名称」『駒沢大学仏教学部論集』第40号2009年511-508頁
- 5) 吉村怜「仏像の着衣 僧祇支と偏衫について」『南都佛教』81号(2002年117頁)
- 6) 中国河南省洛陽市にある石窟寺院。
- 7) 中国、甘肅省天水県の南東にある麦積山に残る石窟寺院。
- 8) 吉村怜「日本古代仏像の着衣とその名称 -袈裟・僧祇支・裙・右袒衫、及び偏衫・直裰・横帔-」『佛教芸術』305 2009年19頁
- 9) 吉村怜「仏像の着衣形式と名称」『駒沢大学仏教学部論集』第40号2009年509-508頁
- 10) 吉村怜「仏像の着衣形式と名称」『駒沢大学仏教学部論集』第40号2009年508頁
- 11) 吉村怜「仏像の着衣形式と名称」『駒沢大学仏教学部論集』第40号2009年508頁

7. 結論

筆者はかつてカンボジア僧の袈裟の着用方法により衣服制作をしたという経験をし、法衣に興味を持った。その根本には西洋や東洋といった概念に捉われない普遍的な価値をもった「一枚の布」で作られた衣服に対する美しさや可能性を感じ、その起源について考察を進めてきた。

第2～4節ではインドで誕生した仏教僧の法衣

の歴史についてまとめた、法衣の形状について久馬慧忠氏は、『袈裟の研究』のなかで「その服装の形、および着こなしはインド固有の服装であったということは容易に予想される、つまり右肩を脱ぎ、大きな長方形の布をぐるぐると体に巻きつける服装である。西洋の服装は獣の毛皮を着ることから発展している、ズボン、上着など、体に合わせて曲線的に作る方向へ進んできたが、東洋の服装は木綿の織物を着ることから発展している、体に合わせた曲線的な方向へは進まず、対照的に直線的方形のものを体に合わせて着こなし方向へ進んできた。」¹⁾と述べている。これはその後の服装史を物語る一節であり、西洋と東洋の衣服の向かうべき方向が示されているところが興味深い。また、仏教僧の法衣制定の事情については宗派による差別化、そして僧侶としてあるべき姿である「偏袒右肩」と「通肩」を袈裟で表現している。

第5節では、仏教と仏像の関係について、仏像の起源、種類、服装について述べた。

ギリシャ美術の影響を受けて紀元1世紀末頃、ガンダーラ（パキスタン）において、仏像の制作がはじまった。仏像は仏教における信仰の対象として創造された仏たちの姿である。西村公朝氏は「宗教的には様々な理由があるであろうが、仏教の祖師である釈迦の姿がモデルではないか」と述べている。²⁾仏弟子たちはその形のよりどころを釈迦の姿に求めたことは当然であろう。この人格化表現が服装を必要とし、その形や着付けがその仏たちの役割を表す上にも重要な位置をしめるようになったのである。

第6節では、中国、唐の僧玄奘と義浄によりあげられたインドにおける僧侶の法衣について僧伽梨、鬱多羅僧、安陀會、僧祇支、泥縛些那ある

いは俱蘇洛迦の五衣とし、これがインド系如来衣の基本であること、そして如来の法衣の着用方法はその組み合わせによってインド式 A 類・B 類と中国式 C 類・D 類に細分化されていることがわかった。中国で盛んに制作されてきたのは中国式 D 類である、日本はインド式が多く、A 類が最も多く次いで B 類である。中国式 D 類は日本ではほとんど制作されていないが法隆寺金堂本尊釈迦像など飛鳥時代のものに見られる。

本研究は仏教僧、仏像の法衣の様々な種類、着用方法について探った。その起源はインドであり仏教の伝来ルートに乗って形を変えながら日本にやって来た。伝来ルートにより仏像がまとう一枚の布にはさまざまな着用方法があり、美しい布の動きとそれぞれの特徴を見ることができる。そこには一枚の布を巻きつけることにより発生する、しわ、垂れ、ひだ、折り目などがあり、現在の服飾的見地から考えるとギャザー、ドレープ、タック、プリーツにあてはまり、衣服に装飾的価値や機能性を持たせている。このように一枚の布による造形が仏教の起源当時から僧服を通して存在するということがわかった。仏像の衣に見られる美しいドレープは一枚の布を僧侶自身の身体にフィットさせることによる布の余り、歪みの反動から出る布の表情の再現であり衣服制作の観点から考えると「着せる」のではなく自身が「着る」という行為によるしわやドレープであるという考えに至ったが、これについては今後さらに考察を続けたい。仏像のまとう一枚の布から服作りの原点を考える契機となった。

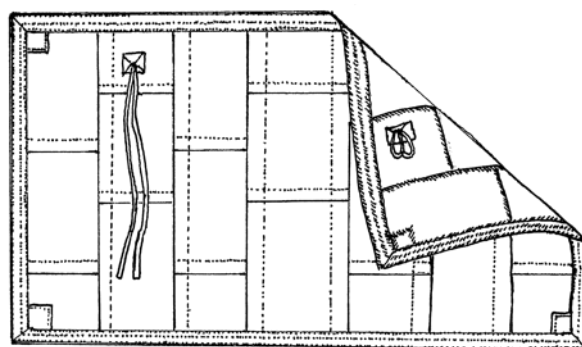
注

- 1) 久馬慧忠『袈裟の研究』（大法輪閣 1978 年）16-17 頁
- 2) 西村公朝「仏像の服装と着付について」『美術解剖学研究会論集』4 号 1977 年 18 頁

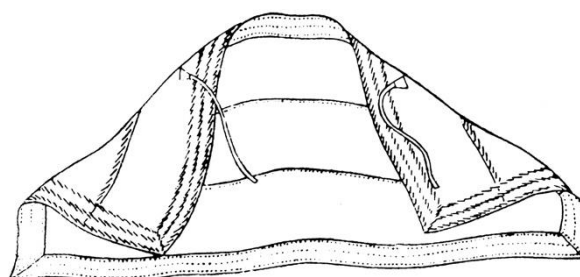
図版



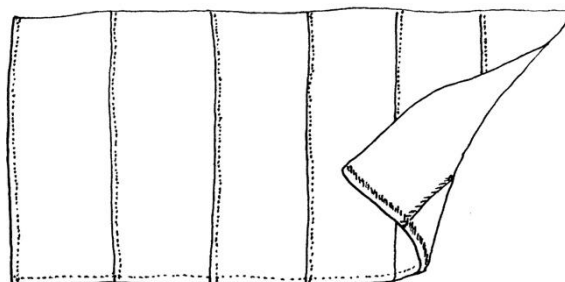
(図 1) COMME DES GARÇONS (図 2) カンボジア僧の法衣
Autumn/Winter 1994-1995 Paris
「Metamorphosis」



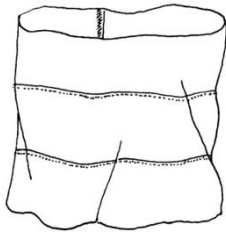
(図 3) 鬱多羅僧(ウッタラーサンガ)



(図 4) 僧祇支(サンカクシカー)



(図 5-a) 泥縛些那(ニヴァーサナ)



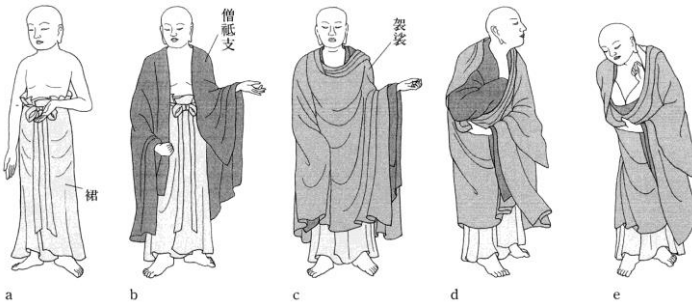
(図 5-b)
俱蘇洛迦 (クスーラカ)



(図 5-c) 帯紐



通肩 偏袒右肩
(図 6) 袈裟の着用方法



(図 7) 『画像須知』にみる裙、僧祇支、袈裟の着衣図



(図 8) 平等院
阿弥陀如来像
(平安時代)



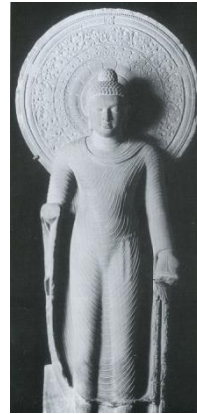
(図 9) 中尊寺
弥勒半跏像
(飛鳥時代)



(図 10) 東寺講堂
不動明王像
(天平時代)



(図 11) 新薬師寺
迷企羅大将像
(天平時代)



(図 12) マトウーラ
立仏像



(図 13) 東大寺
誕生釈迦仏立像
(奈良時代)



(図 14) 深大寺 釈迦像
(白鳳時代)



(図 15) 興福寺旧西金堂
迦旃延像
(奈良時代)



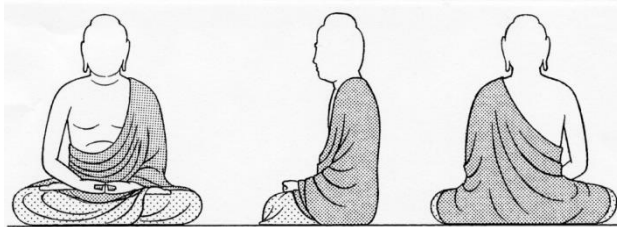
(図16) 東大寺仏連弁
線刻釈迦像
(奈良時代)



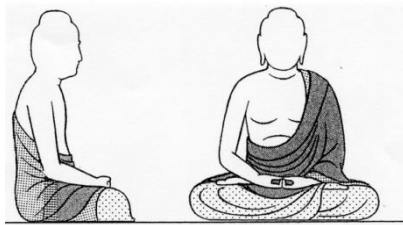
(図17) 平等院鳳凰堂
本尊阿彌陀仏像
(平安時代)



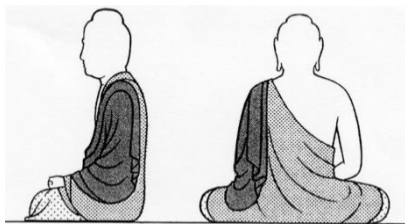
(図19) ガンダーラ仏
(古代インド中期)



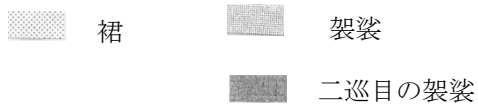
1) 2) 3)



4) 5)



6) 7)



(図18) インド系A類着用方法



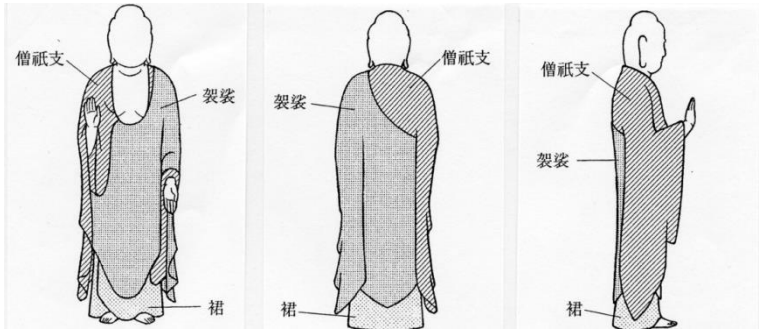
(図20) 岡寺義淵像
(奈良時代)



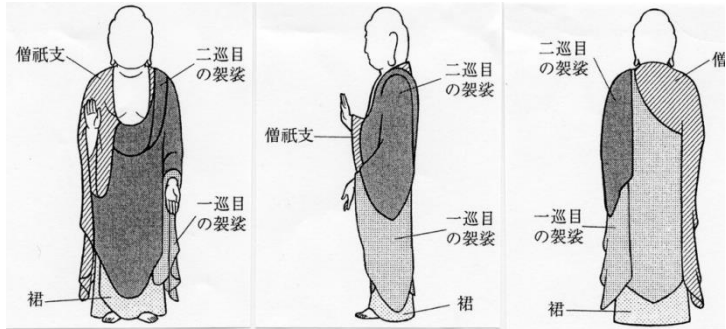
(図21) 東大寺俊乗堂 来迎阿彌陀像
(鎌倉時代)



1) 2) 3)



4) 5) 6)



7) 8) 9)



(図22) インド系B類着用方法



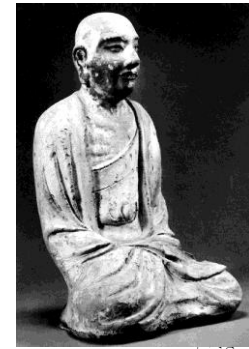
(図23) 甘肃省炳靈寺西秦窟 無量寿仏像 (建弘元年銘)



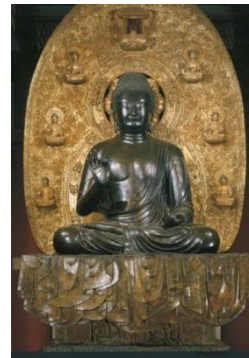
(図24) 龍門石窟・古陽洞 比丘法生龕仏 (北魏)



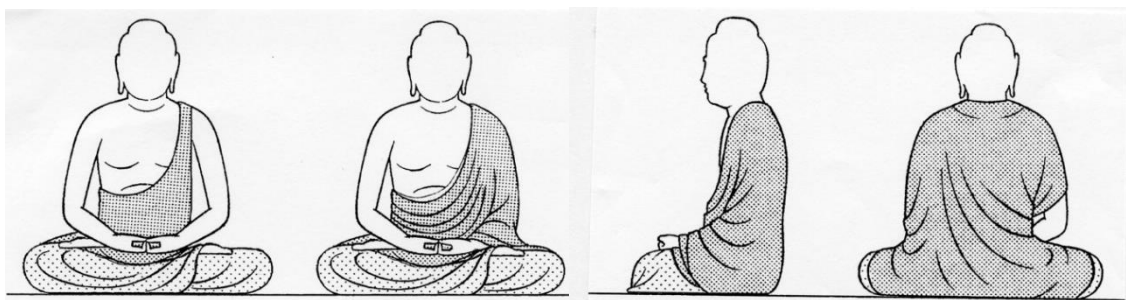
(図25) 法隆寺献納宝物149号 如来立像 (飛鳥時代)



(図26) 法隆寺五重塔本塑壁 比丘像 (奈良時代)



(図27) 薬師寺金堂本尊薬師像 (奈良時代)

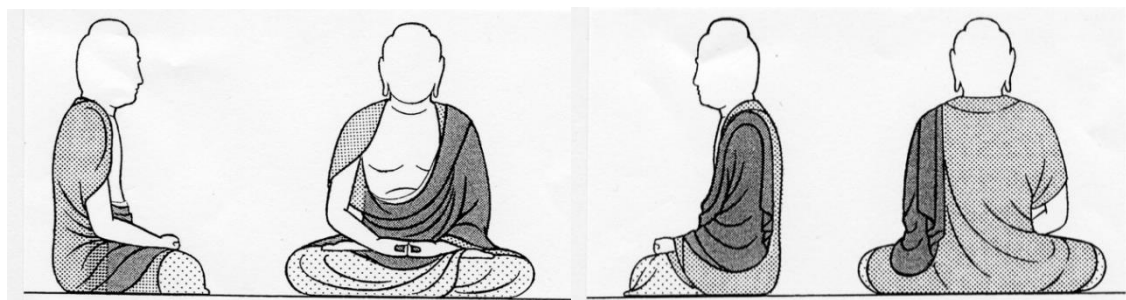


1)

2)

3)

4)



5)

6)

7)

8)



裙



袈裟



二巡目の袈裟

(图 28) 中国系 C 類着用方法



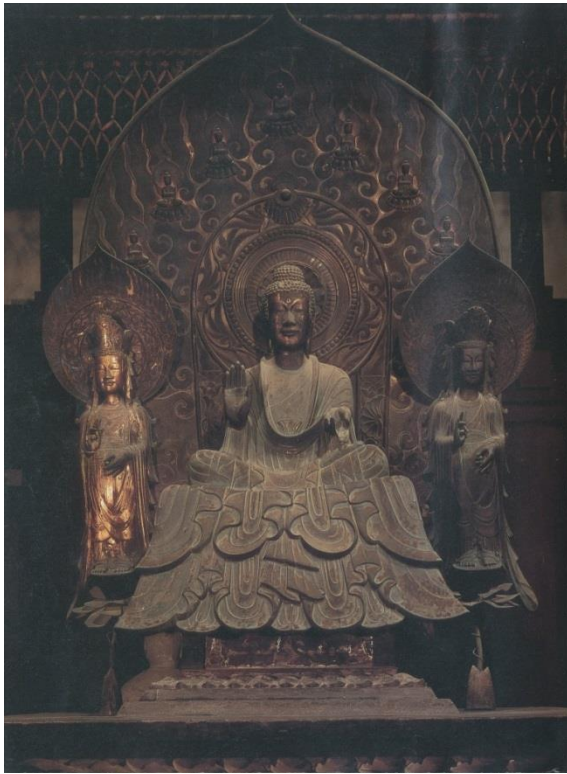
(图 29) 成都万仙寺址出土佛像
(南朝梁)



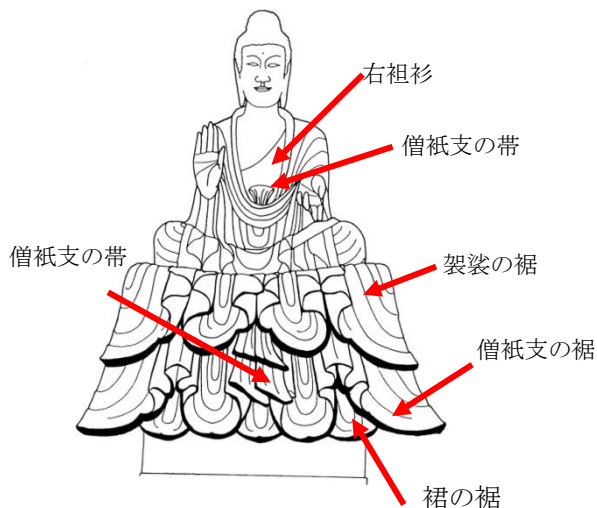
(图 30) 法隆寺金堂
壁画第一号壁积迦像
(奈良時代)



(图 31) 東大寺公慶堂地藏菩薩
(鎌倉時代)



(図 32) 法隆寺金堂釈迦三尊像
(飛鳥時代)



(図 33) 法隆寺金堂釈迦三尊像 本尊の着衣図

図版出展一覧

(図 1) 尾上陽子『94`-95 AUTUMN&WINTER COLLECTIONS PARI/LONDON』(株)ギャップジャパン 1994年)

(図 2) 井筒雅風『法衣史』(雄山閣出版 1974年)

(図 3) 吉村怜「仏像の着衣形式と名称」『駒沢大学仏教学部論集』第40号 2009年

(図 4) 吉村怜「仏像の着衣形式と名称」『駒沢大学仏教学部論集』第40号 2009年

(図 5-abc) 吉村怜「仏像の着衣形式と名称」『駒沢大学仏教学部論集』第40号 2009年

(図 6) 久馬慧忠『仏のころとかたち 袈裟のはなし』(宝蔵館 1989年)

(図 7) 吉村怜「仏像の着衣形式と名称」『駒沢大学仏教学部論集』第40号 2009年

(図 8) 西村公朝『仏像物語 仏はどこに、どんな姿で』(学習研究社 1988年)

(図 9) 西村公朝『仏像物語 仏はどこに、どんな姿で』(学習研究社 1988年)

(図 10) 西村公朝『仏像物語 仏はどこに、どんな姿で』(学習研究社 1988年)

(図 11) 西村公朝『仏像物語 仏はどこに、どんな姿で』(学習研究社 1988年)

(図 12) 濱田隆 西川杏太郎監修『仏教美術入門 2 釈尊の美術』(平凡社 1990年)

(図 13) 關信子 山崎隆之『山溪カラー名鑑 仏像』(株式会社山と溪谷社 2006年)

(図 14) 吉村怜「仏像の着衣形式と名称」『駒沢大学仏教学部論集』第40号 2009年

(図 15) 關信子 山崎隆之『山溪カラー名鑑 仏像』(株式会社山と溪谷社 2006年)

(図 16) 吉村怜「仏像の着衣形式と名称」『駒沢大学仏教学部論集』第40号 2009年

(図 17) 關信子 山崎隆之『山溪カラー名鑑 仏像』(株式会社山と溪谷社 2006年)

(図 18) 本間紀男『木彫仏の実像と変遷』(大河出版 2013年)

(図 19) 吉村怜「仏像の着衣形式と名称」『駒沢大学仏教学部論集』第40号 2009年

(図 20) 關信子 山崎隆之『山溪カラー名鑑 仏像』(株式会社山と溪谷社 2006年) (図 21) 關信子 山崎隆之『山溪カラー名鑑 仏像』(株式会社山と溪谷社 2006年)

(図 22) 本間紀男『木彫仏の実像と変遷』(大河出版 2013年) (図 23)

(図 23) 吉村怜「仏像の着衣形式と名称」『駒沢大学仏教学部論集』第40号 2009年

(図 24) 吉村怜「仏像の着衣形式と名称」『駒沢大学仏教
学部論集』第 40 号 2009 年

(図 25) 奈良国立博物館編集『法隆寺 日本仏像美術の黎明
夏季特別展』1904 年

(図 26) 吉村怜「仏像の着衣形式と名称」『駒沢大学仏教
学部論集』第 40 号 2009 年

(図 27) 關信子 山崎隆之『山溪カラー名鑑 仏像』(株
式会社山と溪谷社 2006 年)

(図 28) 本間紀男『木彫仏の実像と変遷』(大河出版 2013
年)

(図 29) 吉村怜「仏像の着衣形式と名称」『駒沢大学仏教
学部論集』第 40 号 2009 年

(図 30) 吉村怜「仏像の着衣形式と名称」『駒沢大学仏教
学部論集』第 40 号 2009 年

(図 31) 關信子 山崎隆之『山溪カラー名鑑 仏像』(株
式会社山と溪谷社 2006 年)

(図 32) 西村公朝『仏像物語 仏はどこに、どんな姿で』
(学習研究社 1988 年)

(図 33) 吉村怜「仏像の着衣形式と名称」『駒沢大学仏教
学部論集』第 40 号 2009 年